

グスク時代及び近世出土の玉製品に関する考察

Bead-ornaments of Gusuku and Modern Periods

岸本 竹美

KISHIMOTO Takemi

ABSTRACT: The bead-ornaments excavated from the sites in Okinawa, Miyako and Yaeyama archipelago are compiled in this paper to show some localities of bead types. On the other hand, the quantity of excavated beads, as well as the site characteristics, differs between Gusuku and Modern periods. Also, a concentration of bead-ornaments in the 'uganjyo(worship shrine)' can be seen both in the settlement sites and in Gusuku(castle)sites. The bead-ornaments should have had an important function in rituals, according to the folklore data and the descriptions in "Omoro-sosi".

1. はじめに

沖縄、宮古・八重山諸島におけるグスク時代から近世に相当する遺跡において、ガラスや石などを用いた勾玉、丸玉、管玉といった多様な玉製品が出土する。近年、発掘調査の増加に伴ない玉製品の出土数も年々増加する傾向にあるが、玉に関する考古学的研究は、三島格のとんぼ玉に関する論考がある程度で、数少ないのが現状である。

そこで今回は、玉製品に関する各分野の研究成果を概観し、その研究の成果と考古学的研究における課題を呈示した上で、グスク時代から近世に相当する遺跡から出土した玉製品を集成し、その形態的な実態と、出土状況及び出土年代から若干の考察を試みたい。なお、グスク時代の定義は高宮廣衛の定義に準じて12世紀～16世紀¹⁾、近世の定義は梅本哲人の定義に準じて17世紀～19世紀とする²⁾。

2. 研究史

玉製品の研究は1980年代後半から開始された。研究史を概観するにあたって、研究視点の相違及び研究分野の推移に基づき、研究史をⅠ～Ⅳ期に時期区分した。

第Ⅰ期 玉製品に関する記事が掲載される時期

玉製品に関する最古の記録は1317年の『温州府誌』において、青、黄、白色の勾玉類を所持した宮古人が温州に漂着したとの記事である³⁾。1497年には『李朝実録』「齊州島人漂流見聞録」で、先島諸島の人々が「水精大珠」や「掛玉」といた玉類を身につけていたとの記述がみられる⁴⁾。

先島諸島の玉類に関する記録や歌謡は多く、「バイフタ フンタカ ユングドゥ⁵⁾」「土原女按司のアヤグ⁶⁾」などで謡われている。1693年には、宮古人と大和人が日本で製造した多数の勾玉を八重山人に売りつけたため、これを禁ずるものとして「曲玉買入禁止に関する古文書」がある⁶⁾。沖縄最古の歌謡集である『おもろそうし』においても、玉製品が随所で謡われている。「かはら」あるいは「かはら玉」と表現されているのが勾玉である⁷⁾。なお、「かはら」に関しては「瓦」と解釈するか「勾玉」と解釈するかで1900年代前半～1940年代にかけて論議がなされているが、これに関しては第Ⅲ期において後述する。

第Ⅱ期 民俗学による研究が開始（1800年代～1890年代）

玉製品が学問的な研究対象として注目されるのは本期からであり、その先鞭をつけた研究分野は民俗学である。

1887年に、田代安定が研究者として初めて沖縄諸島の玉製品についての報告を行った。田代は沖縄で勾玉が巫女の飾りや家宝となって伝世されていると報告した⁸⁾。1894年には鳥居龍蔵が小竹を管状にし、これを連ねて頸部に掛ける竹珠（はけだま）という装飾品に注目して、竹珠に関する考察と勾玉の形式分類を行った。鳥居は沖縄の勾玉と本土の勾玉の比較検討を今後の課題として呈示した⁹⁾。この課題に最初に取り組んだのは中井伊與太である。1895年、中井は古墳出土の勾玉と沖縄諸島の勾玉を比較、形質、石質、意匠ともに本土のものと類似を指摘、本土からの移入の可能性を呈示した¹⁰⁾。

同年、田代安定は八重山諸島の婦人の頸飾品である、豆科の実を連ねた「アカダマ」の所見と、野国耕吉氏所有の伝世の勾玉を実見したとの報告を寄せている¹¹⁾。

第Ⅲ期 言語学による研究が開始（1900年代～1940年代）

1900年代に入ると、『おもろそうし』にみられる「かはら」の言語学的解釈についての研究が行われる。その先鞭を付けたのが伊波普猷である。伊波は当初、『おもろそうし』で「やまとたびのぼてかはらかいのぼて・・・」と謡われている「かはら」は「瓦」ではあると考えた。金石文の調査のため、東恩納寛惇と共に浦添城跡を訪れた際、「発酉年高麗瓦匠造」と刻銘のある瓦を発見したことから、「おもろ」にみられる「かわら」は城普請のために大和に瓦を買い付けに出掛けたことを謡ったものと解釈¹²⁾、真境名安興も伊波の説を支持したが¹³⁾、1929年に「かはら」は勾玉の意であると訂正した。国頭村辺土名の「ウンジャミクエナ」に「絹衣装取いが うんつけーされて がはな取勾が うんつけーされて」とあることから、「かはら」は「がはな」が訛り、かはら玉の意に解せるとしたのである¹⁴⁾。昭和17年には伊波も自説を訂正している。

言語学的解釈と平行して、民俗学の視点からも引き続き研究が進められている。1919年には島袋源一郎がノロが祭祀に臨む際のいでたちについて触れ、ノロは清白の服装をし、簪をさして勾玉を首に掛け、馬に乗り、多くの神女を従えていると紹介している¹⁵⁾。1923年には宮良當壮が八重山諸島の婦人たちが身につけている玉類の紹介と、玉類を身につけることの意義について考察を行った。八重山では、神人がそのしるしのため勾玉を掛けており、一般の婦人は植物の実を用いて作ったものを首に掛けているとし、玉は単に装飾の為に身につけていたのではなく、悪神や邪気を回避するための魔除けの意味合いがあると考察した¹⁶⁾。

1930年代に入ると勾玉の形式分類や、朝鮮、日本本土の勾玉との比較検討等から、移入元に関する論議が行われるようになる。しかし、対象となる玉製品は伝世品が主で、考古資料を対象に研究が行われるのは第Ⅳ期に入ってからである。

1933年、島田貞彦はノロ、按司の所有する勾玉に注目、大型勾玉と小型勾玉の2形式に分類し、その移入元についての見解を呈示している。両形式とも材質は日本本土、南朝鮮で見られる石製勾玉が多く、沖縄諸島では産出しないものであることから、一個の完形品として両者のうちのどちらかから移入されたものだろうと述べている。島田は、南朝鮮及び日本本土においてほとんど発見されていない大型勾玉について、沖縄という限られた地域で愛好された要因を立証することは現在のところ困難であるが、玉製品の盛行期及び流通を考察するにおいて重要な資料であるとしている。小型勾玉については、本土古墳出土の勾玉とほとんど差がみられないが、小型勾玉の中に朝鮮型の勾玉と類似し

たものが少なからず存在することに注目して、朝鮮との交流の一端を担うものではないかとの見解を呈示している。勾玉の移入経路については、硬玉の所産地を南中国地方と考える浜田耕作の一案を指示し（当時国内で硬玉の産地は未発見。昭和14年に姫川流域で産地が発見された）、玉流通経路の地域的關係において中心点に立つ沖縄の勾玉は、玉の産地から日本本土へ、日本本土から沖縄へ移入されたものではないかと説いている¹⁷⁾。

1944年、下地馨は宮古島の勾玉に注目し、その形態的な特徴や勾玉に関する伝承、古記録から移入元を検討して、本土説と南方説の二説を論じている。宮古島における勾玉の一般的な形式は、胎児形で頭部や頸部の孔に向けて三本の放射線を有する丁子頭勾玉である。宮古島に勾玉が搬入された年代に関しては、『温州府誌』や『勾玉買入れ禁止に関する古文書』等からみて長期に亘るのは明瞭であり、移入の隆盛期は本土と沖縄の往来が活発になる江戸時代中期頃で、琉球、八重山人が勾玉類を珍重していることから大量生産した勾玉を宮古島まで大量に輸出したのであろうと考えた。また一方では、勾玉が「カハラ」「マガーラ玉」と呼ばれることから、「マガーラ玉」は「真爪硅（マカハラ）」の変化で、爪硅（ジャワ）から移入されたためマガーラ玉と称するのではないかと南方説を呈示した。しかし下地は琉球人が南洋貿易に従事していた記録は『球陽』『歴代宝案』『おもろさうし』『明史』等に散見することができるが、勾玉が日本から移入されたという説を覆すだけの資料は現在のところみられないとし、本土説を支持している¹⁸⁾。

第Ⅳ期－a 発掘調査の開始（1960年代～1980年代）

本期に入ると遺跡の発掘調査がはじまることで、考古学の研究調査が開始される時期である。

1964年、琉球政府文化財保護委員会による勝連城跡第一次発掘調査によって、玉製品が49点出土した¹⁹⁾。1979年には沖縄市仲宗根貝塚第二次発掘調査において122点が出土²⁰⁾、1981年には大里村稲福遺跡において400点以上が出土し、うち140個の小玉が柱穴からまとまって得られた²¹⁾。1984年～1986年にわたって行われた勝連城跡発掘調査では、200点以上の玉製品が報告された。うち60点は貝製玉で、得られた資料には未製品も多く含まれることから、上原静は製作過程を4段階にわけた。上原氏はその結果を踏まえ、城内で玉の製作を行っていたであろうとの見解を示している²²⁾。

民俗学の研究も引きつづき行われている。1985年、森田孫栄は八重山諸島の民族芸能に用いる蔓と挿花に付随する露玉の呪性に焦点をあてて論述した。森田は八重山人が玉を愛好する要因として、神霊とのかかわりにおいて玉を用いることで呪性が深まるとの考えがあったのではないかと述べている。『おもろさうし』に謡われる玉も、霊力を憑依させ、名の象徴としていた様子が伺える。そのことから、八重山芸能における頭飾り下げる小玉、露玉も靈魂の象徴、または依りしろとなつてであろうと述べている²³⁾。

第Ⅳ期－b 考古学的研究の開始（1980年代～現在）

1988年、三島格は宮古島の砂川元島で出土した2個のとんぼ玉に注目し、九州及び台湾のとんぼ玉との比較を行い、移入経路について考察した。ここで初めて発掘によって得られた出土品を対象とした考古学的な研究が行われた。三島は移入元について共伴する陶磁器から中国説、台湾の先住民が同類、同型のものを大量に所持していることから台湾説の2説を呈示した。三島は宮田俊彦の福州と琉球を往復する船便が台湾北部の淡水に寄港しているようだとの見解から（図2）、先住民が所持するとんぼ玉が福建系漢民族にながれ、それが宮古人に渡ったのだらうと考え、台湾説を支持している²⁴⁾。

1900年、三島は若干の資料の追加と所見を呈示、平西貝塚採取のガラス玉がパイワン族所持のガラ

ス玉に類似していることから、台湾説を補強するものとして紹介している²⁵⁾。

1999年、知念村教育委員会の遺構整備にかかる発掘調査が知念村斎場御嶽でおこなわれ、三庫理の「イビヌメー（威部の前）」と称される場所から、金箔の勾玉、翡翠、瑪瑙、ガラス製の勾玉総数9点が出土した。金箔製のうち1点は青磁碗の中に納められ、その他の勾玉は銭貨と共伴して出土している。「イビヌメー」は最も神聖な場所とされていること、勾玉の総数である「9」という数字が琉球神道の聖なる数にあたることから、これらの玉類は「鎮め物」としての解釈がなされている¹⁹⁾。

本期における言語的研究に、崎間敏勝の論考がある。崎間は『琉球国由来記』の記事に「内殿ヨリ下シ玉フ御剣、御玉」とあることから、玉は剣と共に王権の重要なシンボルであったと考えている。また、崎間は『おもろさうし』のなかの「たまの みつ まわり」という語句に注目した。この語はおそらく三重にして首に掛けることのできる長さの玉の輪であり、「世々せ みつ まわり」との語句もみられることから、この玉をもつことで世果報（豊作）を寄せ付けるとの願意がこめられていると解釈した²⁶⁾。

3. 検討

報告書内で取り扱われている玉製品は報告者によって分類方法が異なっており、形式分類を行う上での統一された基準が設定されていないのが現状である。そこで日本本土における古墳時代の玉製品の形式分類を参考に、当該地出土の玉製品の形式分類を試みたい。

3-1. 日本本土における玉製品の形式分類

- 1, 勾玉（長く湾曲した玉）
- 2, 管玉（円筒状をなし、筆の軸を短く切ったようなもの）
- 3, 白玉（管玉の極めて短いもので、長さが直径に達しないもの）
- 4, 切子玉（共通の底面を有する多角錐あるいは円錐体）
- 5, 棗玉（長い切子玉の稜角をとったような形で、棗の実に似たもの）
- 6, 丸玉（球状をなすもの）
- 7, 蜜柑玉（丸玉の側面に縦の凹線があるもの）
- 8, 山椒玉（共底面円錐体の側面に縦の凹線があり、山椒の実に似たもの）
- 9, 平玉（丸玉を両側面から押しつぶしたもの）
- 10, 小玉（丸くて小さい玉）
- 11, 算盤玉（横断面が円形で、戴頭円錐形を2つ合わせたもの）
- 12, 雁木玉（2色以上のガラスで縞模様を表したもの）
- 13, トンボ玉（2色以上のガラスを溶着し、斑紋を表したもの）

1～10までは高橋健自による分類で、今日的研究の基礎となっている⁹³⁾。11～13はそれ以後知られるようになった種類を藤田富士夫が紹介している⁹⁴⁾。

3-2. 当該地出土の玉製品の形式分類

まず、報告者の判断の相違によって形式の混在している丸玉、小玉、平玉、白玉を丸玉として包括、高さを基準にⅠ～Ⅲのサブタイプを設定し、なんらかの傾向が読み取れるかを試みた。

・Ⅰ（1mm～2.9mm） ・Ⅱ（3mm～4.9mm） ・Ⅲ（5mm以上）。

マキガイ製の貝製玉に関しては、その形態から円盤状玉と設定、形態的特徴が顕著で分類基準の明確な勾玉、管玉、棗玉、算盤玉、切子玉、雁木玉に関しては前述した日本本土の分類基準に準拠することとする。その他、六角形玉は報告書の所見に準じ、滴形玉はその形態から筆者が設定した。

- ・六角形玉－六角錘の上端と下端をすぼめた形状を呈するもの
- ・滴形玉－下端部にふくらみがあり、滴状を呈するもの

以上、当該地出土の玉製品を丸玉、勾玉、円盤状玉、管玉、棗玉、算盤玉、雁木玉、切子玉、六角形玉、滴形玉の10種に分類し、検討を行った。

3－Ⅲ.形式別出土傾向

表4－1・2に遺跡別出土一覧表、図1に遺跡分布図を示し、図3～6に各形式を図示した。

丸玉が（図3 1～9）1432点、全体の85%と最も多く、勾玉（図5 1～9）74点、円盤状玉（図4 1～5）65点、管玉（図6 1～3）18点、棗玉（図6 4～5）10点となっている。その他の形式（図6 6～10）の出土数は2～1点とごくわずかなものであった。

丸玉1432点のうち、報告書及び実見によって計測が可能だった1315点を対象にサブタイプ別の分類を行った。出土状況をサブタイプ別にみると（表1）、Ⅰの出土が51%と半数を占め、ついでⅡが33%、Ⅲが16%の出土となった。この結果を見ると、1mm～2.9mmに収まる範囲のタイプが最も一般的であったと思われる。しかし、この出土傾向になんらかの有意性がみられるかを検討するにはいかなかった。

3－Ⅳ.材質別出土傾向

いずれの種類でも、ガラス製のものが最も多く出土している。

材質がもっともバラエティに富んでいるのは丸玉で、ガラスのほかに陶製、石製、石灰岩製、土製、木製、貝製、のものがみられる。ガラス製や陶製の玉は貴重品としての価値があったものと思われるが、土製、石灰岩製、木製、貝製、骨製のものに関しては、実用していた可能性の他に、なんらかの祭祀や儀式で玉製品を使用するための代用品であった可能性が考えられる。主な出土遺跡をあげると、木製が根謝名グスク²⁸⁾、貝製が真志喜森川遺跡⁴⁴⁾や仲宗根貝塚²⁰⁾、土製、石灰岩製が我謝遺跡⁴⁸⁾で出土している。

勾玉はガラスの他に仲宗根貝塚³²⁾や我謝遺跡^{48)・49)}などで土製、天界寺⁶⁵⁾で貝製、斎場御嶽³⁶⁾で金製、翡翠製、硬玉製、瑪瑙製のものが出土している。土製勾玉・貝製勾玉に関しては、丸玉と同じく代用品であった可能性が考えられる。貝製勾玉に関しては、貝が丸玉ではガラスについて多く使用されている点、勝連城跡においてマキガイ製の円盤状玉が城内で製作されていた可能性がある点から、貝という材質を用いることに何らかの意味があった可能性もあるのではないかとと思われる。

金製勾玉に関しては、真栄平房敬が戦前、聞得大君の所有する首飾りの中に金製勾玉も数点含まれていたと紹介をしているが⁹⁶⁾、現在聞得大君の勾玉が紛失しているため、比較検討を行えないのが現状である。

その他の玉はガラス以外に砂川元島で水晶製⁸⁰⁾、高腰遺跡で翡翠製⁷⁹⁾、伊佐前原第一遺跡で貝製の管玉¹²⁾、勝連城跡で陶製の棗玉³⁶⁾などが出土している。

3－Ⅴ.遺跡の性格及び年代別出土状況

次に、出土遺跡を大きくグスク、集落遺跡、古墓、宗教・祭祀遺跡の4つの性格に分類し、グスク

時代、近世それぞれの出土状況から検討を試みたい。複合遺跡に関しては、玉製品が出土した地点の属する性格にから設定した。なお、攪乱層、表土層から出土したものや出土層が不明なものに関しては、検討の対象から除外した。

表2-1、2にグスク時代の遺跡別出土状況、表3-1、2に近世の遺跡別出土状況を示した。

まずグスク時代の出土状況をみると、グスクからの出土が5遺跡160点、集落遺跡からの出土が11遺跡695点と集落遺跡が遺跡数、出土数ともにグスクを大きく上回っている。グスクで最も出土数が多いのは勝連グスク、集落遺跡で最も出土数が多いのが稲福遺跡である。

グスク内で出土した玉製品は、遺跡の性格状権力者や有力者の所有物であったと考えられる。勝連城二の郭拝所から丸玉、勾玉が出土しており²⁸⁾、玉が祭具として用いられた可能性が高い。

集落遺跡では稲福遺跡において特筆すべき出土状況を呈している。同遺跡では「上御願」拝所近くの柱穴からまとまって140個の小玉が出土しており、また玉製品は伴わないものの、「上御願」拝所に伴う石列から20数枚の古銭が一括して出土している。この場所は『琉球国由来記』に収録された「上之嶽」に比定される拝所であろうと推定されることから²¹⁾、稲福遺跡は祭祀上の重要な遺跡であった可能性がある。

グスク時代において、仲宗根貝塚、稲福遺跡、真志喜森川遺跡遺跡など複数の集落遺跡からまとまった出土がみられるのに対し、近世の出土傾向をみると古墓からの出土が4遺跡420点、宗教遺跡からの出土が3遺跡41点、集落遺跡からの出土が2遺跡4点で、グスク時代とは異なる出土状況を呈している。

古墓においては、420点中406点がナーチャー毛遺跡出土である。そのうち1個の蔵骨器から300点以上の玉製品がまとまって検出されており、現時点では古墓における一括出土の貴重な例である⁵⁶⁾。そのほかに蔵骨器からの検出は奥間ノ口墓の36号蔵骨器から2点、ヤッチのガマの1号区画9内、8号区画9内より各1点、9号区画12内より2点が検出している。

宗教・祭祀遺跡において特筆すべき出土状況を呈しているのは、斎場御嶽における勾玉9点の一括出土である。勾玉のうち1点は、青磁碗の中に納められた形で検出され、他の8点の勾玉は敷き詰められた古銭と共伴して出土した。青磁・勾玉・古銭が一括して出土した場所は「威部の前（イビヌメー）」と呼称される場所で、これは神の在所を示す言葉であること、勾玉、青磁碗がともに9点ずつ出土しており、「9」という数字が琉球神道において最も神聖な数として認識されているという観点から、報告書では「鎮め物」との解釈がなされている²⁶⁾。

グスク時代ではグスクや集落遺跡などから多数出土する玉製品が、近世にはいると宗教遺跡、古墓からの出土に変化している。統一王朝を確立させるにあたり、首里王府は固有信仰を再編して聞得大君を頂点とした神女組織を確立した⁹⁵⁾。グスク時代にグスクや集落において、玉製品を祭祀具として独自の祭祀を行っていたものが、祭祀の統合により廃絶されたため、出土傾向にこのような変化がみられるようになった可能性が考えられる。

4. 今後の課題

以上、本稿では沖縄諸島及び宮古八重山諸島におけるグスク時代～近世出土の玉製品に関する集成と考察を行った。本節ではそれらを踏まえた上で今後の研究課題を呈示し、本稿のまとめとしたい。

本稿では玉製品を分類するにあたってその形態とサイズから分類を行い集成したが、その出土傾向になんらかの有意性がみられるかまで検討するにはいたらなかった。玉製品の材質をみるとガラス製のものが最も多かったが、マキガイを用いた円盤状玉や、丸玉に土製、木製、貝製が、勾玉にも土製、

貝製のものがみられるように、在地の素材を用いた製品も出土している。これらは代用品の可能性が考えられるが、あるいはこれらの材質を用いるのに何らかの意義があった可能性も否定できない。文献資料や民俗学的な使用例が手がかりとなるのではないかと思われる。また、玉製品の出土遺跡や出土年代から、非常に表層的ではあるが玉製品の持つ意義について考察を行ったが、推測や仮定の域を出ない不十分なものとなってしまった。遺跡の性格や出土遺構、共伴遺物を視野に入れた出土遺跡全体からの検討と、墓制や祭祀に関する研究とのリンクが必要であると思われる。

なお、本稿では玉製品の移入元に関する考察を行うには至らなかった。今後は玉製品全般を対象に研究を深化させていくことで、他地域との交流の様相をより明確にすることが課題である。

謝辞

本稿は2001年3月に提出した卒業論文『奄美・沖縄諸島及び宮古・八重山諸島出土の玉製品について』を加筆・修正したものである。指導教官である上原静先生には丁寧なご指導、ご助言を頂き、さらに下記の方々からは貴重なご教示ならびに資料実見のご配慮を賜りました。なお、図版作成の際には仲宗根瑞香さんのご協力を頂きました。末尾となりましたが記して心からの感謝を申し上げます(五十音順・敬称略)。

呉屋義勝、高宮廣衛、當銘清乃、豊里友哉、宮城弘樹、宮平真由美

(きしもと たけみ：調査課 嘱託員)

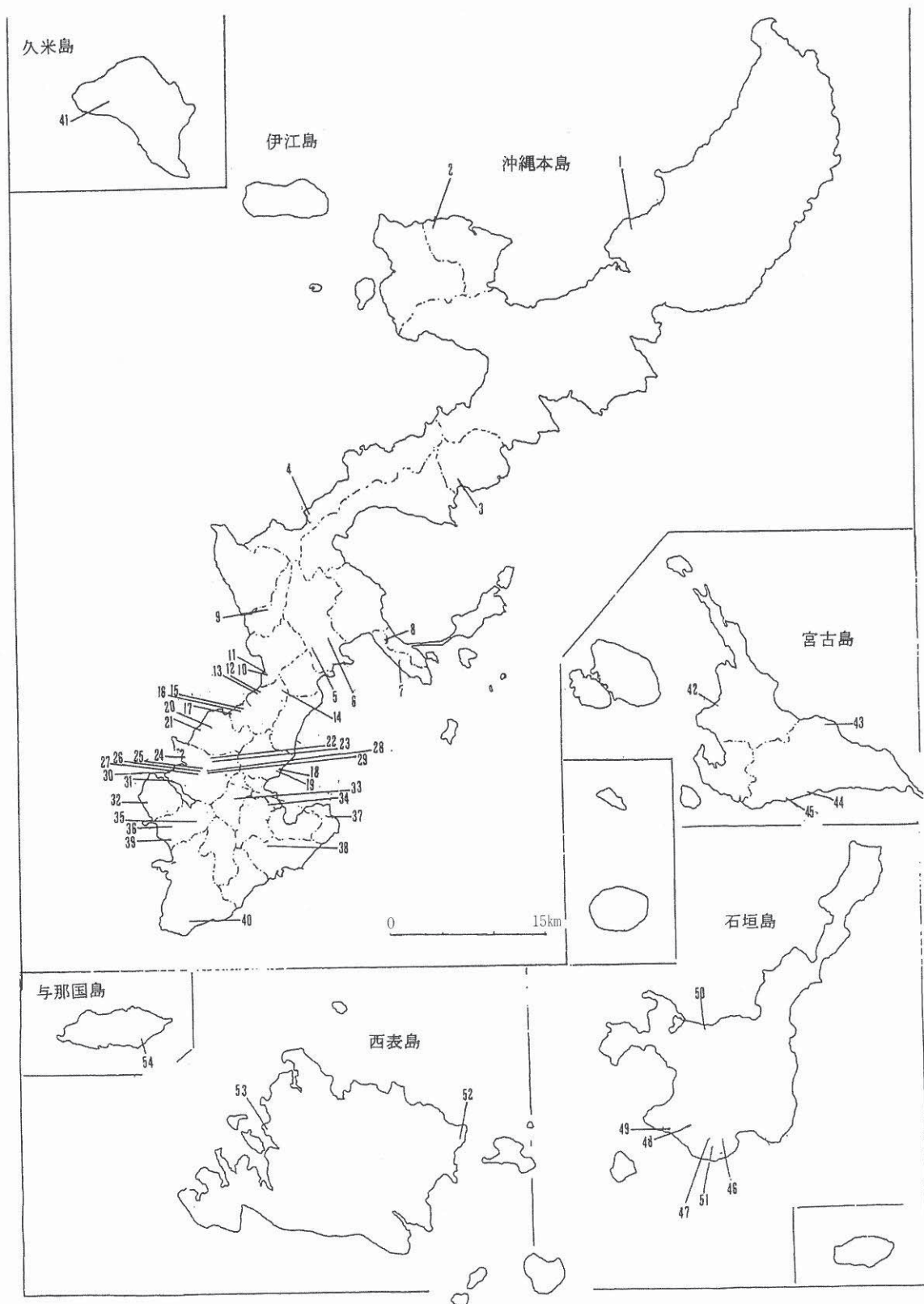
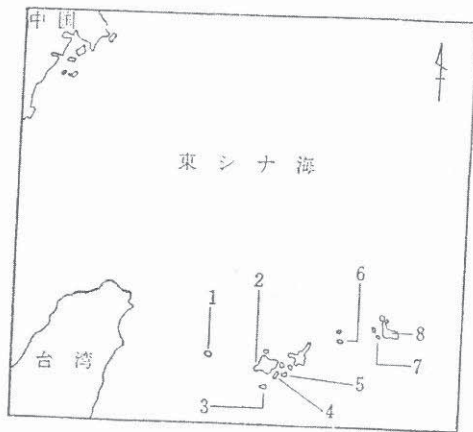


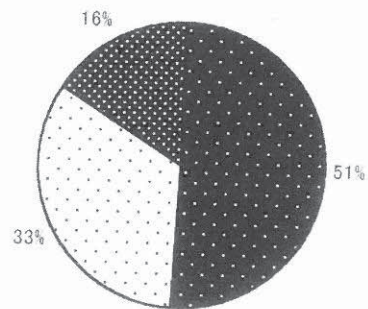
図1 出土遺跡分布図 (数字は第4表1. 2に対応)



1. 与那国島 2. 西表島 3. 波照間島 4. 新城島 5. 黒島
6. 多良間島 7. 伊良部島 8. 宮古島
(キールン)

図2 宮古島周辺概念図 (註17)

表1 丸玉タイプ別分類表



■ I (1mm~2.9mm) □ II (4.9mm~3mm) ■ III (5mm以上)

表2-1 グスク時代遺跡別出土状況
(グスク)

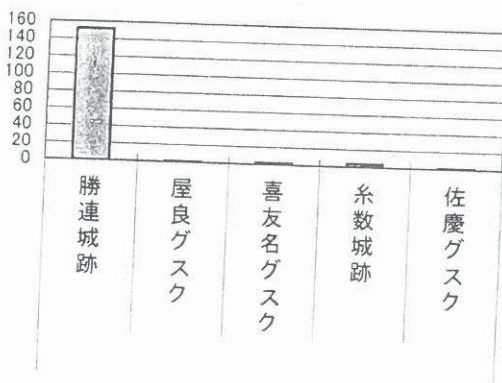


表2-2 グスク時代遺跡別出土状況
(集落遺跡)

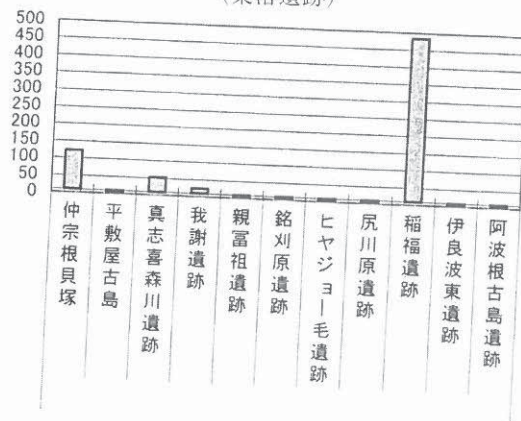


表3-1 近世遺跡別出土状況
(集落遺跡、宗教・祭祀遺跡)

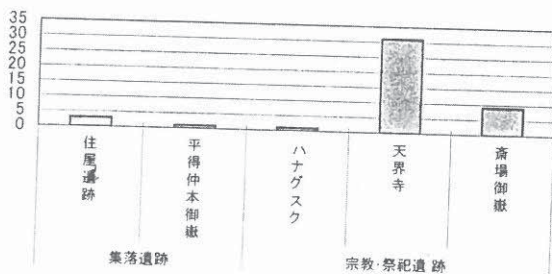


表3-2 近世遺跡別出土状況
(古墓)

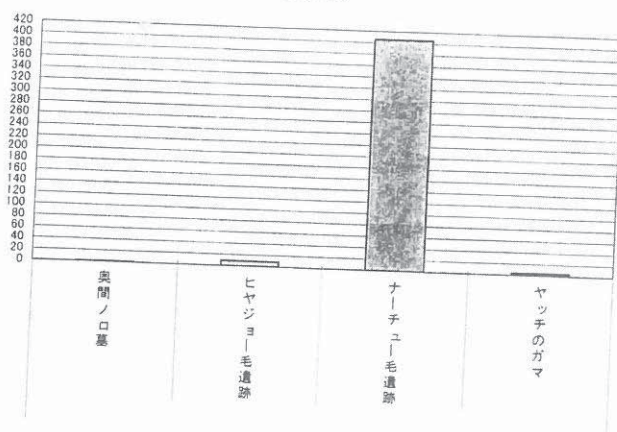
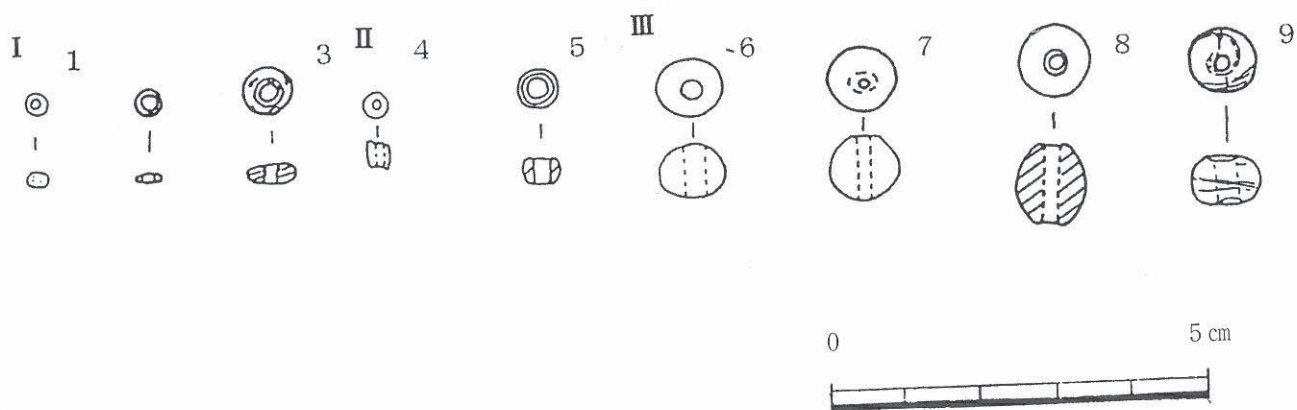


表 4 - 1 玉製品出土一覧

No.	遺跡名	所在地	遺跡の年代	遺跡の性格	丸玉	勾玉	円盤状玉	管玉	素玉	切子玉	算盤形玉	雁木玉	六角形玉	滴形玉	丸玉欠損	複数癒着	合計	注
沖縄本島																		
1	根謝名グスク	大宜味村字謝名城	グスク	グスク	1											1	1	28
2	今帰仁城跡	今帰仁村今泊	グスク	グスク	7	4			1	1							13	29
3	漢那ウエースアタイ遺跡	宜野座村漢那	グスク～近世	生活・生産遺跡	1										1		1	30
4	座喜味城跡	読谷村座喜味	グスク	グスク											3	1	122	20
5	仲宗根貝塚	沖縄市仲宗根町	グスク	集落遺跡	118	1											1	32
6	越来城跡	沖縄市越来	グスク	グスク	1													34～36
7	勝連城跡	勝連町南風原	グスク	グスク	134	19	60	8	2								3	37
8	平敷屋古島遺跡	勝連町平敷屋	グスク～近世	集落遺跡	1	2											2	38
9	屋良グスク	嘉手納町字屋良	グスク	グスク	2			1									1	39
10	北谷城	北谷町字大村城原	グスク	グスク				1									1	40
11	北谷町第7遺跡	北谷町字大村城原	グスク	集落遺跡				1									5	41
12	伊佐前原第一遺跡	宜野湾市伊佐	グスク～近世	複合遺跡	3			2									5	42
13	喜友名グスク	宜野湾市伊佐	グスク～近世・近代	グスク	5												1	43
14	上原同原遺跡	宜野湾市普天間	グスク	集落遺跡	1										4		56	44
15	真志喜森川遺跡	宜野湾市真志喜	グスク～近世	集落・祭祀場	48			1	2			1					4	45
16	真志喜石川第2遺跡	宜野湾市真志喜	グスク	集落遺跡	4												2	46.47
17	奥間ノ口墓	宜野湾市宇治泊	近世	古墓	1										7		51	48.49
18	我謝遺跡	西原町	グスク～近世	集落遺跡	40	4											6	50
19	拝山遺跡	西原町	グスク	生活遺跡	3		3										3	51.52
20	浦添城跡	浦添市字仲間	グスク～近世	グスク	3										3		3	53
21	親富祖遺跡	浦添市字屋富祖	グスク～近世	集落遺跡										1	2		8	54
22	銘川原遺跡	那覇市大字銘川	グスク	集落遺跡	4	1									3	2	19	55
23	ヒヤジョー毛遺跡	那覇市大字銘川	グスク	集落遺跡・古墓群	14										12	11	406	56
24	ナーチャー毛遺跡	那覇市大字天久	近世	古墓群	383							1					10	57～59
25	首里城跡	那覇市首里	グスク～近世	グスク	9												2	60
26	旧中城御殿	那覇市首里	近世	屋敷跡	2												3	61
27	円覚寺跡	那覇市首里	グスク～近世・近代	宗教遺跡	53											1	56	62～65
28	天界寺跡	那覇市首里	グスク～近世	宗教遺跡・集落遺跡	94	6			1	3	2						108	66
29	御細工所	那覇市首里	グスク～近世	工所跡	1												1	67
30	ハナグスク	那覇市樋川	グスク	祭祀遺跡	1												10	68
31	湧田古窯跡	那覇市泉崎	近世	古窯	10												1	69
32	尻川原遺跡	那覇市大字具志	グスク～近世	集落遺跡		1											1	70
33	安平田遺跡	南風原町字照屋	グスク	屋敷跡	1												1	

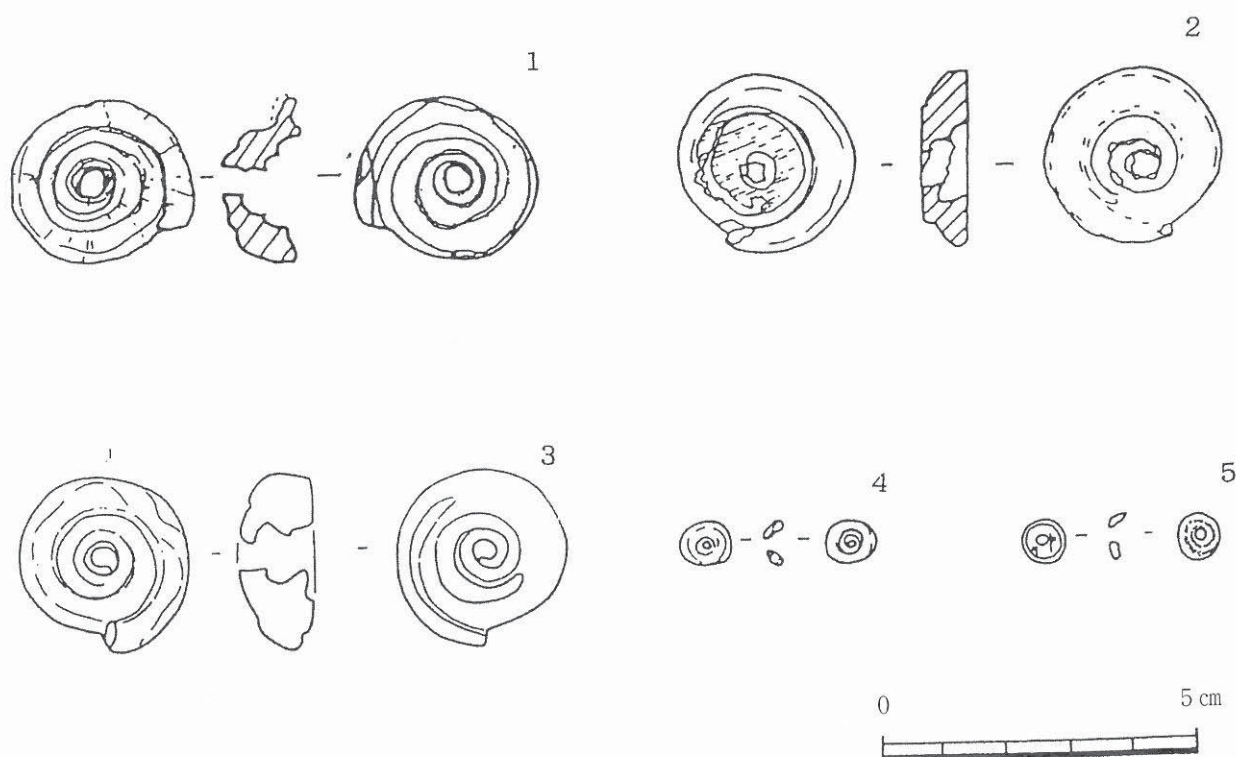
表 4-2 玉製品出土一覧

遺跡名	所在地	遺跡の年代	遺跡の性格	丸玉	勾玉	円盤状玉	管玉	素玉	切子玉	算盤形玉	雁木玉	六角形玉	滴形玉	丸玉 欠損	複数癒着 ・連結	合計	註
34 稲福遺跡	大里村字稲福	古スク	集落遺跡	452	5		2	1		1				22	7	483	21
35 高嶺古島遺跡	豊見城村字高嶺	古スク～近世	集落遺跡	2												2	71
36 伊良波東遺跡	豊見城村字伊良波	古スク	集落遺跡											1		1	72
37 斎場御嶽	知念村字久手堅	古スク～近世	祭祀遺跡		9											9	26
38 糸数城跡	玉城村字糸数	古スク	古スク	1	1		2							1		5	73
39 阿波根古島遺跡	糸満市阿波根	古スク～近世	集落遺跡											2		2	74
40 佐慶古スク	糸満市字山城	古スク			1									1		2	75
久米島																	
ヤツチのガマ	具志川村字上江州	近世・近代	古墓	3				1									
宮古島																	
住屋遺跡	平良市西里	古スク～近世	集落遺跡	7	2											9	77.78
高腰遺跡	平良市西里	古スク	古スク	2												2	79
砂川元島	城辺町砂川元島原	古スク	集落遺跡	2	1		1				1					5	80
宮国元島	上村宮国	古スク	集落遺跡	4												5	81
石垣島														1		5	81
カンドウ原遺跡	石垣市大浜	古スク～近世	集落遺跡	2	3											5	82.83
フルスト原遺跡	石垣市大浜	古スク～近世	複合遺跡	1												1	84
アラスク村遺跡	石垣市平得中上原	古スク	集落遺跡	1	2											3	85
ピロースク遺跡	石垣市新川	古スク	スク	5	4											9	86
ヤマハレー遺跡	石垣市大高	古スク	集落遺跡	1	1											1	87
平得仲本御嶽遺跡	石垣市平得	古スク	集落遺跡	3	3											7	88
西表島																	
与那良遺跡	竹富町与那良	古スク	集落遺跡	1	1									1		2	89
上村遺跡	竹富町祖内	古スク～近世	集落・生産遺跡		1											1	90
与那国島																	
与那原遺跡	与那国町祖内	古スク	生産遺跡	1	2											3	91
合計				1432	74	65	18	10	2	2	2	2	1	68	25	1701	



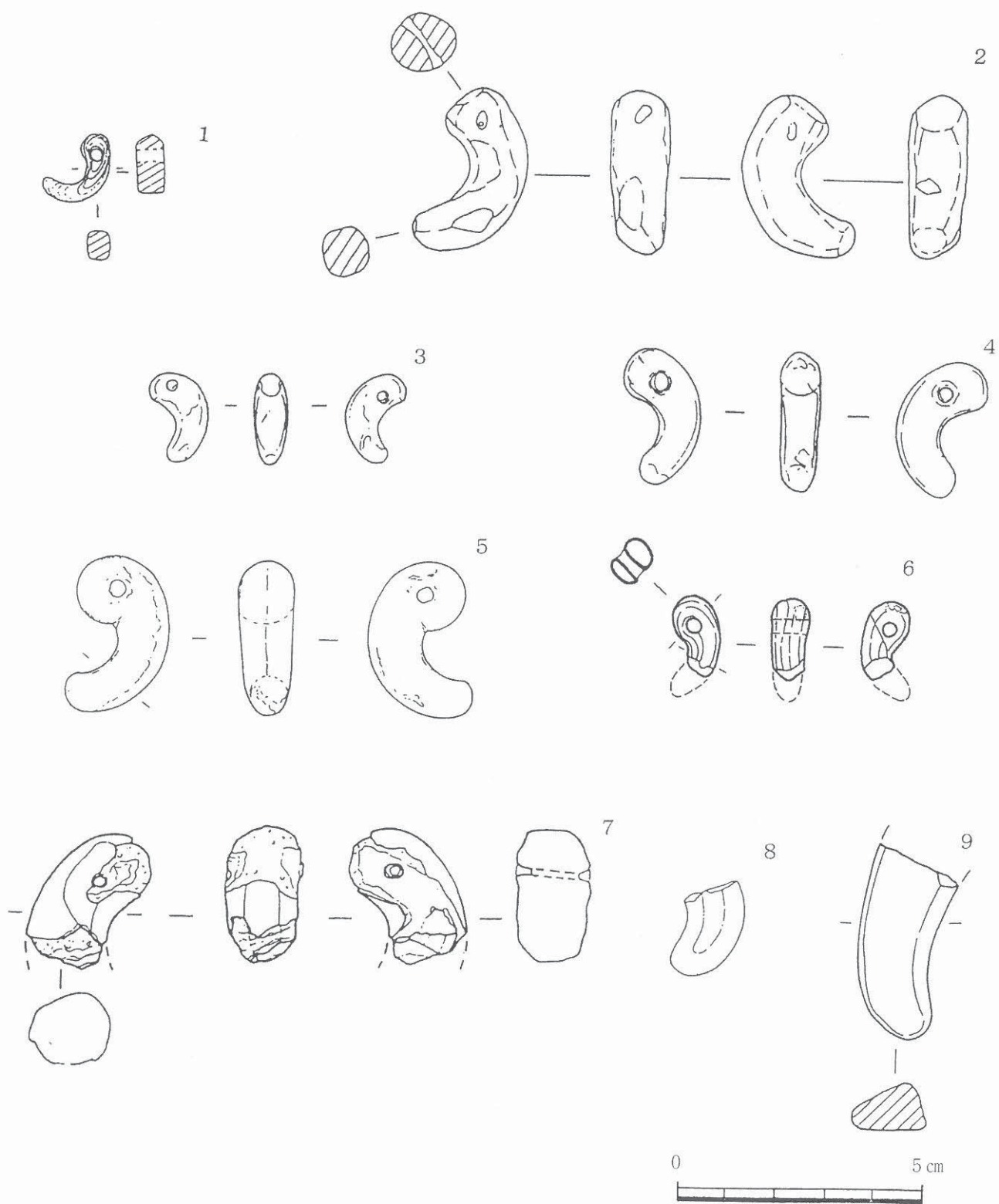
- I 1 ヒヤジョー毛遺跡：ガラス製（註55） 2, 3 宮国遺跡：ガラス製（註81）
 II 4 勝連城跡：ガラス製（註36） 5 喜友名グスク：石英（註42）
 III 6, 7 勝連城跡：陶製（註36） 8 今帰仁城跡：ガラス製（註29） 9 稲福遺跡：ガラス製（註21）

図3 丸玉



- 1, 4, 5 勝連城跡（註36） 2 北谷町第7遺跡（註40） 3 拝山遺跡（註50）

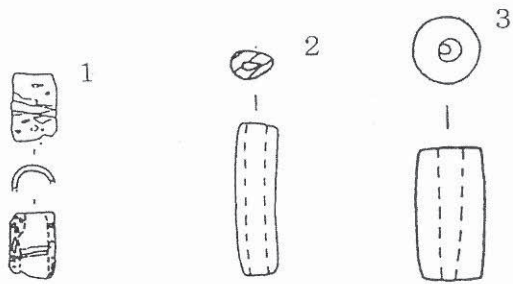
図4 円盤状玉



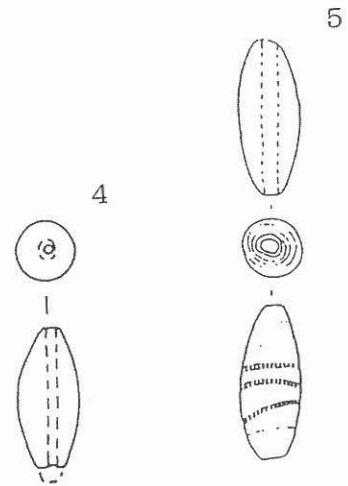
1 今帰仁城跡：ガラス製（註29） 2 我謝遺跡：土製（註48） 3. 4. 5 斎場御嶽：3 ガラス製 4 瑪瑙製 5 金製：（註26）
 6 天界寺：貝製（註65） 7 天界寺跡：ガラス製（註62） 8 今帰仁城跡：翡翠製（註29） 9 勝連城跡：石製（註36）

図5 勾玉

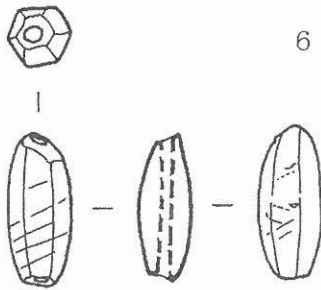
管玉



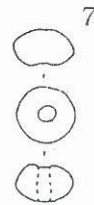
棗玉



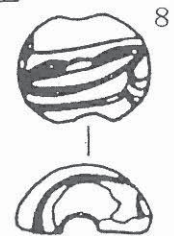
切子玉



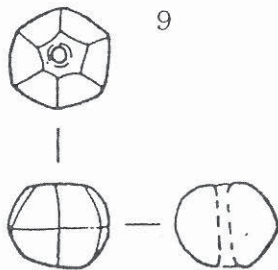
算盤形玉



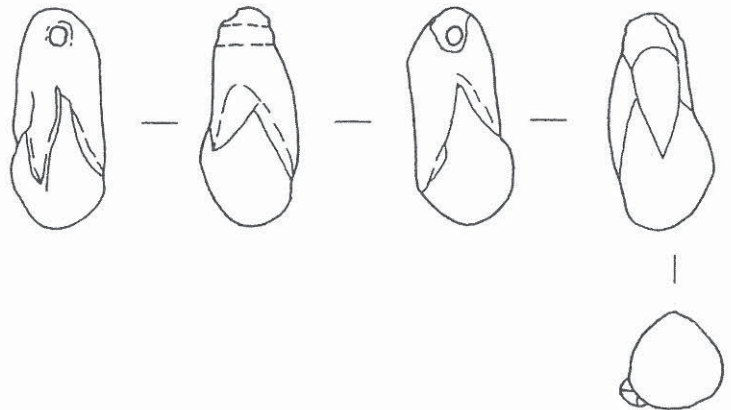
雁木玉



六角形玉



滴形玉



その他

- 1 真志喜森川遺跡：ガラス製（註44） 2 今帰仁城跡：ガラス製（註29） 3 勝連城跡：水晶製（註36）
 4 勝連城跡：陶質（註36） 5 真志喜森川遺跡：ガラス製（註44） 6 天界寺：ガラス製（註65）
 7 真志喜森川遺跡：ガラス製（註44） 8 首里城跡：ガラス製（註57） 9 天界寺：ガラス製（註62）
 10 奥間ノロ墓：ガラス製（註47より筆者が再トレース）

図6 管玉・棗玉・切子玉・算盤形玉・雁木玉・六角形玉・滴形玉

引用・参考文献

- 註1 高宮廣衛 1994 「4 歴史時代」『沖縄の先史時代と文化』 第一書房
- 註2 梅本哲人 1983 「II 近世の沖縄」『沖縄歴史地図 歴史編』 高宮廣衛他編 柏書房
- 註3 須藤利一 1944 「すちうま」『南島覚書』
- 註4 嘉手納宗悦 1972 『李朝実録琉球史料第二集』 球陽研究会
- 註5 喜捨場永 1970 『南島論叢』 伊波普猷先生記念論集委員会
- 註6 伊波普猷 1972 「古琉球」『伊波普猷全集 第一巻』 平凡社
- 註7 仲原善忠、外間守善編 1974 『校本おもろさうし』 角川書店
- 註8 田代安定 1887 「人類学上ノ取調ニ付キ沖縄ヨリノ通信」『東京人類学会雑誌』 2巻16号 東京人類学会
- 註9 田代安定 1887 「沖縄県八重山諸島婦人頸珠ノ説」『東京人類学会雑誌』 10巻106号 東京人類学会 1895
- 註10 鳥居龍蔵 1887 「琉球諸島女子現用ノはけだま及ビ同地方ノ堀ダシノ曲玉」『東京人類学会雑誌』 9巻16号 東京人類学会
- 註11 中井伊與太 1896 「琉球諸島発見ノ曲玉ト阿波国発見ノ曲玉」『東京人類学会雑誌』 10巻106号 東京人類学会
- 註12 伊波普猷 1911 「土塊石片録」『古琉球』
- 註13 真境名安興・島倉龍治 1923 『沖縄一千年史』
- 註14 真境名安興 1929 「笑古漫筆」『真境名安興全集』 備忘録 第9巻
- 註15 島袋源一郎 1973 『沖縄県国頭郡志』 明治文献
- 註16 宮良當壯 1981 「民俗論考」『宮良當壯全集13』 第一書房
- 註17 島田貞彦 1933 「琉球勾玉考」『歴史と地理』 31巻1号
- 註18 下地馨 1944 「宮古曲玉の研究」『南島』 3号
- 註19 琉球政府文化財保護委員会 1965 『勝連城跡第一次発掘調査報告書』
- 註20 沖縄県教育委員会 1983 『仲宗根貝塚第1,2次発掘調査報告書』
- 註21 沖縄県教育委員会 1983 『稲福遺跡発掘調査報告書（上御願地区）』
- 註22 上原静 1990 「装飾品 4貝製品」『勝連城跡—北貝塚ニの郭および三の郭の遺構調査』 勝連町教育委員会
- 註23 森田孫栄 1985 「八重山芸能における頭飾りの呪性—蔓・玉の周辺—」『琉大史学』 第14号 琉大史学会
- 註24 三島格 1988 「沖縄、宮古島のとんぼ玉」『考古学論叢』 下巻 吉川弘文館
- 註25 三島格 1990 「南島のガラス玉追補」『南西日本の歴史と民俗』 第一書房
- 註26 知念村教育委員会 1999 『斎場御嶽整備事業報告書』
- 註27 崎間敏勝 1993 「おもろ風俗考」『琉球の文化と歴史の考察』 第3集 琉球文化歴史研究会
- 註28 大宜味村教育委員会 1984 『大宜味村の遺跡』 詳細分布調査報告 大宜味村文化財調査報告書第2集
- 註29 今帰仁村教育委員会 1983 『今帰仁城跡調査報告書I』
- 註30 宜野座村教育委員会 1990 『漢那ウェースアタイ遺跡—近隣緑地公園建設に伴う発掘調査報告』 宜野座村の文化財（9）
- 註31 読谷村教育委員会 1986 『座喜味城跡』
- 註32 沖縄市教育委員会 1988 『越來城跡』 沖縄市文化財調査報告書 第11集
- 註33 琉球政府文化財保護委員会 1965 『勝連城跡第二次発掘調査報告書』
- 註34 勝連町教育委員会 1983 『勝連城跡—昭和56年度本丸南側城壁修復に伴う遺構発掘調査報告—』 勝連町の文化財第5集
- 註35 勝連町教育委員会 1984 『勝連城跡—南貝塚及びニの丸北地点の発掘調査—』
- 註36 勝連町教育委員会 1990 『—北貝塚・ニの郭および三の郭の遺構調査—（1）』 勝連町の文化財第11集

- 註37 勝連町教育委員会 1981 『平敷屋古島遺跡』
- 註38 嘉手納町教育委員会 1994 『屋良グスク-屋良城跡公園整備事業に伴う範囲確認調査-』嘉手納町文化財調査報告第1集
- 註39 北谷町教育委員会 1992 『北谷城-第7次調査-』北谷町文化財調査報告書第12集
- 註40 北谷町教育委員会 1992 『北谷城第7遺跡』北谷町文化財調査報告書第2集
- 註41 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『伊佐前原第1遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第4集
- 註42 沖縄県教育委員会 1999 『喜友名貝塚・喜友名グスク』沖縄県文化財調査報告書
- 註43 宜野湾市教育委員会 1992 『上原同原遺跡の発掘調査記録』宜野湾市文化財調査報告書第16集
- 註44 宜野湾市教育委員会 1994 『真志喜森川遺跡』宜野湾市文化財調査報告書第18集
- 註45 宜野湾市教育委員会 1989 『土に埋もれた宜野湾』宜野湾市文化財調査報告書第10集
- 註46 宜野湾市教育委員会 1996 『奥間ノロ墓〔図録編〕-一般国道58号牧港立体事業に係る緊急発掘調査報告書-』宜野湾市文化財調査報告書第24集
- 註47 宜野湾市教育委員会 1996 『奥間ノロ墓〔図録解説〕-一般国道58号線牧港立体事業に係る緊急発掘調査報告書-』宜野湾市文化財調査報告書第24集
- 註48 西原町教育委員会 1983 『我謝遺跡-個人住宅建設に伴う緊急発掘調査報告-』西原町文化財調査報告書4集
- 註49 西原町教育委員会 1983 『我謝遺跡-分譲宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書-』西原町文化財調査報告書第5集
- 註50 沖縄県教育委員会 1987 『拝山遺跡』沖縄県文化財調査報告書第83集
- 註51 浦添市教育委員会 1984 『浦添城跡第二次発掘調査概報』浦添市文化財調査報告書第6集
- 註52 浦添市教育委員会 1985 『浦添城跡発掘調査報告書』浦添市文化財調査報告書第9集
- 註53 浦添市教育委員会 1983 『親富祖遺跡』浦添市文化財調査報告書第3集
- 註54 那覇市教育委員会 1997 『銘刈原遺跡-那覇市新都心土地計画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅳ』那覇市文化財調査報告書第35集
- 註55 那覇市教育委員会 1994 『ヒヤジョー毛遺跡-那覇市新都心土地地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書Ⅰ-』那覇市文化財調査報告書第26集
- 註56 那覇市教育委員会 2000 『ナーチャー毛古墓群-那覇市新都心土地地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書Ⅶ-』那覇市文化財調査報告書第44集
- 註57 沖縄県教育委員会 1988 『首里城跡-欽会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査』
- 註58 沖縄県教育委員会 1998 『首里城跡-南殿・北殿の遺構調査報告』沖縄県文化財調査報告書第120集
- 註59 沖縄県教育委員会 1998 『首里城跡-御庭跡・奉神門の遺構調査報告』沖縄県文化財調査報告書第133集
- 註60 沖縄県立博物館 1993 『旧中城御殿』
- 註61 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 『円覚寺跡-遺構確認調査報告書-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第10集
- 註62 那覇市教育委員会 1999 『天界寺跡-首里城線街事業に伴う緊急発掘調査報告-』那覇市文化財調査報告書第42集
- 註63 那覇市教育委員会 2000 『天界寺跡-首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告-』
- 註64 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『天界寺跡(Ⅰ)-首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第2集
- 註65 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 『天界寺(Ⅱ)-首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第8集

- 註66 那覇市教育委員会 1991 『御細工所跡ー城西小学校建設工事に伴う緊急発掘調査報告ー』 那覇市文化財調査報告書第18集
- 註67 那覇市教育委員会 1999 『ハナグスクー波上宮復興造営事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査ー』 那覇市文化財調査報告書第41集
- 註68 沖縄県教育委員会 1999 『湧田古窯跡（Ⅳ）ー県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査ー』 那覇市文化財調査報告書第136集
- 註69 那覇市教育委員会 1993 『尻川原遺跡ー具志宮城土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告ー』 那覇市教育委員会
- 註70 南風原町教育委員会 1993 「第Ⅴ章発掘調査報告 安平田遺跡」『南風原町の遺跡ー町内発掘（詳細分布）調査報告書ー』 南風原町文化財調査報告書第1集
- 註71 豊見城村教育委員会 1990 『高嶺古島遺跡ー老人保健施設（桜山荘）建設工事に伴う緊急発掘調査報告ー』 豊見城村文化財調査報告書第4集
- 註72 豊見城村教育委員会 1987 『伊良波東遺跡ー伊良波小・中学校建設工事に伴う緊急発掘調査報告ー』 豊見城村文化財調査報告書第2集
- 註73 玉城村教育委員 1991 『糸数城跡ー発掘調査報告書ーⅠ』 玉城村教育委員会調査報告書第1集
- 註74 沖縄県教育委員会 1994 『阿波根古島遺跡ー那覇・糸満線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告ー』 糸満市文化財調査報告書第8集
- 註75 糸満市教育委員会 1994 『佐慶グスク・山城古島遺跡ー喜屋武・山城線道路改良工事に伴う発掘調査報告ー』 糸満市文化財調査報告書第8集
- 註76 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『ヤッチのガマ・カンジン原古墓ー県営かんがい排水事業（カンジン地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ー』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第6集
- 註77 平良市教育委員会 1983 『住屋遺跡（俗称・尻間）発掘調査報告』
- 註78 平良市教育委員会 1992 『住屋遺跡ー平良市新庁舎建設に伴う記録保存の為の緊急発掘調査概報』 平良市文化財調査報告書第2集
- 註79 城辺町教育委員会 1989 『高腰城跡ー範囲確認調査報告書ー』 城辺町調査報告書
- 註80 砂川元島遺跡調査団 1976 『砂川元島遺跡発掘調査概報（第二次）』
- 註81 上野村教育委員会 1980 『宮国元島ー宮国元島遺跡調査報告書ー』
- 註82 石垣市教育委員会 1977 『八重山石垣島カンドウ原遺跡発掘調査報告』 沖縄県石垣市文化財調査報告第2集
- 註83 沖縄県教育委員会 1984 『カンドウ原遺跡ー灌・排水工事に係る緊急発掘調査ー』 沖縄県文化財調査報告書第58集
- 註84 石垣市教育委員会 1977 『フルスト原遺跡』 石垣市文化財調査報告書第1集
- 註85 沖縄県教育委員会 1985 『アラスク村遺跡・ウイヌズ遺跡発掘調査報告書』 沖縄県文化財調査報告書第62集
- 註86 石垣市教育委員会 1983 『ビロースク遺跡ー沖縄県石垣市新川・ビロースク遺跡発掘調査報告書ー』 石垣市文化財調査報告第6号 石垣市教育委員会
- 註87 青山学院大学文学部史学研究室 1977 『ヤマバレー遺跡発掘調査概報』
- 註88 沖縄県教育委員会 1976 『平得仲本御嶽遺跡発掘調査報告』
- 註89 与那良遺跡調査団 1982 『与那良遺跡発掘調査概報』
- 註90 沖縄県教育委員会 1991 『上村遺跡ー重要遺跡確認調査報告ー』 沖縄県文化財調査報告書第98集
- 註91 与那国町教育委員会 1988 『与那良遺跡ー個人農家の畑地改良に伴う緊急発掘調査報告ー』 与那国町文化財調査報告書第2集

- 註92 高橋健自 1911 『鏡と劔と玉』 富山房
- 註93 藤田富士夫 1990 『考古学ライブラリー52 玉』 ニュー・サイエンス社
- 註94 上原静 1990 「装飾品 4 貝製品」『勝連城跡—北貝塚ニの郭および三の郭の遺構調査』勝連町教育委員会
- 註95 高良倉吉 1983 「古琉球」『沖縄歴史地図』宮城栄昌・高宮廣衛他 柏書房
- 註96 真栄平房敬 1972 「勾玉」『沖縄文化史事典』琉球政府文化財保護委員会
- 註97 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『首里城跡—管理用道路地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第1集
- 註98 沖縄県埋蔵文化財センター 2002 『首里城跡—継世門周辺地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第9集

追記：原稿執筆後、新たに興味深い資料がみつかった。研究史でもふれたが、鳥居龍蔵、田代安定などが宮古・八重山において調査を行った際に持ち帰ったと思われる勾玉の写真3点である。波照間島において入手されたものであり、当時の調査範囲や勾玉の分布を知るうえで貴重な資料である。なお、この資料を掲載するにあたって安里嗣淳氏、盛本勲氏のご教示と、沖縄県公文書館の高嶺朝誠氏、当山昌直氏には資料の使用についてのご許可とご協力を頂きました。記して深く感謝申し上げます。

東京大学総合研究所博物館所蔵の沖縄関係考古資料（沖縄県公文書館提供）



石英



碧玉



翡翠

